

人來り、そちほ麥飯がすきぢや程に、米のめしはあれども出さぬといふに、いや米の食かならば、五里もゆかふとて又くふた、

〔嬉遊笑覽十上〕手打そば、予が幼きころ母の唄ひて聞かせられし小歌の節、今おもへば難波十日

夷の賣物の歌に擬したるものなり、唱歌は赤いもの盡、甘いもの盡、色々あり、うまいものにとり

ては、たうこうあんそばきり、西の宮太郎が麥飯。上林、みな同時行はれたる食ものどもなり、太郎

は葛西太郎と稱せられぬ、中ごろすたれて、武藏屋權三のみ流行て、太郎は無かりしが、又近年再

興したり、中略或人云、太郎はもと村中の番人にて、堤下に居て鯉魚を賣しが、頓て

〔後はむかし物語〕むさしや權三は、初めは麥飯計を焚て喰せたりと云、我十五六の頃なり、麥計庵

といふ計を斗の字と心得て、ばくけいあんとは云はず、ばくとあんと唱たるもをかし、其後年を

追て繁榮し、今の姿になりても、ぶら挑灯の抱澤瀉わかぞらの脇に、麥斗の字を書たり、其後是もやめて、む

さしや權三にて通りぬ、今も、秋葉より來る老人は、ばくとくといへり、權三が家内のものは却

てしらぬなるべし、

口麥計の二字の書は、紀文の筆と申承及候、如何や承知仕たく候、今に傳へ有と承り候、權三に

はなく他人の家に藏すと云々、

〔本朝食鑑穀一〕黍訓二岐

集解黍多種類、略中稻黍者所用少而味亦不佳、農間作飯粥而食、略下

〔和漢三才圖會穀百三〕稷音即今云木微

本綱、稷與黍一類二種也、略中稷熟最早、作飯疎爽香美、爲五穀之長、略中

按、稷、古者爲飯每食、略下

〔延喜式十六〕庭火并平野竈神祭、略内